

矛盾の果ての幸せー『ザリガニの鳴くところ』

世界的ベストセラーとして評価の高い『ザリガニの鳴くところ』を執筆したディーリア・オーエンズは動物学者であり、この作品が最初の小説である。ただし、彼女は共著で出版した『カラハリアフリカ最後の野生に暮らす』がすぐれたノンフィクションとしてベストセラーとなっており、美しい文章を書くことで知られている。

動物生態学の研究者として活動し、最近、評論や小説をホームページで発表するようになった私としては、どのような物語が展開されているのか知りたいとともに、そこで描かれる人間を含めた生物がどのような視点で描かれているのか興味は尽きなかった。

著者は現在、動物の保護や生態系の保全について活動しているとのことであるが、若い時にはカリフォルニア大学で動物行動学を専攻し、博士号を取得している。この頃の動物行動学では、同じ種の個体でも、自分のもつ遺伝子を次の世代に残すべく、利己的かつ適応的にふるまうことが広く認められるようになっており、その実例が本書でも数多く取り上げられている。適応的でない行動は進化の過程で消滅すると考える行動生態学＝社会生物学は動物行動学の主流となり、その創始者のひとりであるエドワード・ウイilsonは、人間についての諸学もいずれ行動生態学に統一されるとさえ言い放った。それでは『ザリガニの鳴くところ』の登場人物とその行動は、行動生態学の文脈から、どのように評価されるのか、というのが、ここで展開する私の論議の骨格である。

ベストセラーには共通して認められるパターンがある。惨めな境遇に陥った主人公が紆余曲折を経て大成功を収めることが、主人公と自分を同一視する読者に快感を与えるストーリー。漫画でも映画でも小説でも同じである。しかし、現代の小説では、単純なサクセス・ストーリーでは読者を魅了することはできない。似たような物語が山のようにあるからである。本書が多くの読者を惹きつけたとしたら、そこにはただのサクセス・ストーリーではない何か特別な仕掛けがあるにちがいない。

この小説のプロローグは一九六九年に、チェイス・アンドルーズの死体が発見される場面となっているが、読者は当然のこととして、それが何を意味するのかわからない。そして、次の場面では、チェイスの死から一七年前に六歳になった主人公のカイアが、自然に満ちた湿地帯の家に住んでいること、その母親が五人の子供たちと夫を捨てて家出することが描かれている。母が家を出たのは、父親による度重なる暴力が原因である。

小説の冒頭で殺人事件を連想させ、つづいて母の家出である。読者としては、それがなぜなのか読み進めずにはいられない構成になっている。逆に、漫画やアニメに慣れた現代人は、作品の冒頭で退屈だと、それ以上読み進めようとはしない。その点で、殺人と母の家出から始める仕掛けが、ベストセラーとなった第一ポイントである。

小説の舞台が海へつながる湿地帯であることは魅力的である。日本で湿地といえば、釧路湿原や沖縄のマングローブ林などを想起させるが、もともと日本には広大な湿地が残されていた。東京が湿地の開拓と埋め立てによって発展したことはよく知られている。名古屋も大

阪も河川の下流部に広がっていた湿地を開拓している。八郎潟や諫早湾の干拓は、かつては米不足を解決する切り札のようにもてはやされたが、今ではその弊害が問題にされている。同じような現象は世界中で生じており、湿地の陸地化と開発は、そこで生きる人々の生業を奪い、自然を破壊し、稀少な生物を絶滅に追いやっている。このような湿地のもつ悲しいイメージが、この小説の主人公である少女の不幸と重なって見える。

カイアの父は怒鳴っているか、むっつりしているかのどちらかであり、子供たちにも容赦なく、自分の子供でありながら拳で殴るようになる。その結果、カイアの一番上の兄と二人の姉もいなくなり、残った兄のジョディも家を出て行ってしまふ。カイアは父と二人きりになるが、その父もしばしば家を留守にする。顔を合わすと虐待されるカイアは、父とできるだけ関わらないことが最善の生き方だと考え、父親より先に起きて家を離れ、林や水辺で一日を過ごし、夜になると忍び足で家に戻り、湿地に近いポーチのベッドで眠るようになった。カイアの父は第二次世界大戦で一生治らない怪我を負い、そのために支給される障害者手当が唯一の収入源だった。

湿地の周辺では、逃れがたい差別が横行していた。カイアは学校に行ってみるものの、ほかの子たちに馬鹿にされて嫌な思いをすることになり、それから通学しなくなる。彼女にとって友と言えるのは、カモメやサギなどの鳥類だけだった。

カイアが七歳になって一人でエンジンのついたボートを操れるようになると、同じようにボートを走らせるテイトという名前の少年と知り合いになる。また、父との関係も少しだけ改善し、二人で釣りに出かけるようになった。しかし、父が家に帰って来る回数はしだいに減り、カイアが十歳になると、父は二度と家に戻らなくなった。一人で暮らさざるをえなくなったカイアは、採集した貝を売って生きるようになる。

ここで、カイア一家の行動について考察してみよう。まず初めに、カイアの母が家を出た理由であるが、父からの暴力に耐えかねたことは明らかである。カイアの兄弟たちが次々に消えた理由も、父による虐待である。カイアの母にしても兄弟にしても、湿地で豊かな生活をしていただけではなかったもので、家を出て自立することによって未来が開けると判断したのであろう。一方、カイアはまだ幼かったので、家を出るわけにはいかなかった。

カイアの父は家庭内暴力によって、妻と子を失ったことになるが、この行動に意味はあるのだろうか。一般的に言って、貧乏な家庭でも、多くの子をつくる場合は多い。子をつくることによって、家族が協力して働き、収入を増やすことができるからである。とくに農業、漁業、工場などを営む場合には、子供の手を借りることが必要である。カイアの兄弟姉妹が成長した段階で、家出してしまうことは、父にとっても損失ではなかったのか。

この疑問を解決するポイントは、父が障害者手当に依存して生活していたことにある。カイアの家族は、広大な土地と生産性の高い湿地を所有しながら、それを所得に結び付ける努力を怠っていた。おそらく父が飲酒に溺れて愚かだったせいもあるだろう。そして、父自身の体が不自由なことと合わせて考えれば、食い扶持を減らすという点で、妻や子はいないほうがよかったのかもしれない。

動物において親が子を捨てたり、殺したり、食べたりする理由は、主に二通りに分けられる。第一に、父親が遺伝的につながっていない連れ子を虐待し殺す例であり、当初は霊長類で認められたが、現在では幅広い動物で知られている。子殺しによって、メスが発情し、自分の子を作りやすくなるという利点もある。同様の現象は人間でも生じている。

第二の理由は、食物不足などの経済的な理由によって、子を育てることがむずかしくなった場合である。子育ては親にとって投資であるから、途中で子育てに失敗する、すなわち育てた子が死んだり孫を作れなかったりしたら、自分の遺伝子を残すうえで投資は無駄になってしまう。そうであるならば、見込みのない子は早くあきらめ、次の繁殖の機会に備えた方が賢明であろう。親は、しばしば自分の子や卵を食べてしまうこともある。その理由は動物によって同じではなく、空腹に耐えかねるような場合もある。しかし、行動生態学的には、子や卵を食べることが、次の繁殖における親の成功度を高め、子孫の全数を増加させるのであれば、共食いは成立する。

子がある程度成長して自立できる、すなわち捕食者に殺されずに生き延びることができるようになれば、親は子育てを止めるか継続するか決めなければならない。もし親が一生の間に何度も繁殖する多回繁殖を行う動物であれば、子育てを止めて次の繁殖に備えるべきである。親にとって次の繁殖が期待できないのであれば、親は子育てを継続して、子の生存や繁殖がさらに良くなるよう行動すると考えられる。

カイアの母も父も、子供たちがある程度の年齢になってから、子育てを放棄して家を出ている。日本でもしばしば報告される赤ちゃん放棄とは異なり、実際には子供たちは、カイアを含めて自立していった。その結果、母親は新しい土地で暴力を受けずに過ごし、父親は障害者手当を一人で使い、カイアの兄弟姉妹はそれぞれの人生を開拓していった。一人残されたカイアは、広大な土地が育む生物資源のおかげで生き延びることができた。父は消え去る前に、カイアに魚釣りを教え、ボートも残していった。何日か留守にすることも多かったが、その間にカイアが一人で食べていけることを確認したのかもしれない。この家族にとっては、一致団結して農業や水産業によって繁栄する道もあっただろうが、小説で展開されるストーリーが生じてもし不思議ではない。

子を育てることには、親の老後に助けてもらうという意味もある。助けてくれるかどうかは、その親子の関係にもよるが、夫の暴力によって家を出たカイアの母親には、夫が家を出たのちにカイアの元に戻って来る道もあっただろう。しかし、彼女がそうしなかったということは、それなりに幸せな生活を送っていたのであろう。同様の推察は他の兄弟姉妹についてもあてはまる。カイアの父は、カイアとともに二人で暮らす道もあっただろう。カイアに料理やその他の家事を任せ、老後は自身の世話をさせるという道。なぜそうしなかったのかは不明だが、父は消え去る前にしばしば別の場所に行っており、そこで別の家庭を持っていたり、好きな女性がいたりしたのかもしれない。この解釈に立てば、父のカイアの家族への暴力は、すべてを放棄するための戦略であったのかもしれない。

ここまでの考察により、カイアが一人きりにされた事情が必ずしも不自然なものではな

く、カイアの父母兄弟がそれぞれの損得を考えて生じたとみなすことができる。

そのうえで、カイアの家族が湿地に住むという点で、惨めで卑しいと差別されていたことにも留意したい。カイア自身も学校で他の子供に卑しめられていた。また、カイアが買い物に行く店の黒人夫婦も白人たちに差別されていた。カイアの家族は白人でありながら、湿地に住む下等民としての扱いを受けていたのである。おそらく世界中で同様の差別が生じているであろう。家族が次々に湿地の家を出て行った背景には、差別から逃れたいという思いもあったかもしれない。

かくして一人きりになったカイアは、ボートを使って湿地で活動する。貝を採って売り、それによって食料やガソリンを購入する生活は安定していた。貝を買い取ってくれる黒人のジャンピン夫婦の存在は、カイアにとって信頼できる他人が現れたことになり、多くの読者はここでひとまず安堵する。湿地は生物生産のうえでも多産な環境であり、貝のほかにも魚、エビ・カニ類、鳥類など、食料になる動物は多いと思われる。

カイアにとってボートはなくてはならない必需品であったが、複雑な地形の湿地帯を走り回るためには、さまざまな苦労があったにちがいない。カイアが幼い時には、ボートで帰り道がわからなくなり、そこで偶然出会ったテイトに助けってもらったことがある。それ以来、テイトのことが気になるカイアであったが、自分から近づくことはできないまま年月だけが過ぎていった。この間、冒頭で死体が発見されるチェイスやその他の白人の子供たちに遭遇することもあったが、湿地の少女、謎の原始人などと罵倒されるだけだった。

カイアが13歳になるとテイトと再会し、テイトがカイアの兄の友人であり、カイアのことを知っていたことを教えられる。テイトはカイアに親切に対応してくれただけでなく、読み書きを教えてくれるようになる。ここでまた、カイアに自分を重ねる読者は、カイアにボーイフレンドができたことを喜ぶだろう。毎日のようにカイアに読み書きを教えるテイトはカイアに女性としての魅力を感じていた。

しかし、この幸せは永遠につづくわけではなかった。テイトは生物学をより深く学ぶために、大学に通うことになり、カイアと別れてしまう。テイトを慕うカイアには、テイトを追って湿地を離れる道もあっただろう。しかし、カイアは学校にも通っておらず、知らない土地でテイトに負担をかけずに生きていくことはむずかしかったのかもしれない。

テイトを失ったカイアは失意の中で、生物の標本作製し、それを分類したり、絵を描いたりして気を紛らわせた。動物の骨をしらべて、そのすり減り具合によって年齢を分けたと書かれているので、カイアの研究レベルは相当なものであったのだろう。やがてカイアは図書館にも通うようになり、分類学だけでなく、行動生態学を学ぶようになる。

生物が自分のDNAを残すために生存競争をすることは、行動生態学の基本である。強いオスが縄張りをつくって弱いオスを追い払うことや、メスが自分の子の生存率を高めるために強いオスを選ぶことは、よく知られている。本書では、ときには交尾の相手を食べてしまったり、子供を捨ててしまったりする母親もいるけれども、それらは困難を乗り越えるために編み出された方策だと書かれてある。ここでカイアは、自分を見捨てた親にもそれなり

の理由があったであろうこと、自分が生き抜いて成功するためには殺人も一つの方法であることを認識したのかもしれない。

そして19歳になったカイアに近づいてきたのが、チェイス・アンドリュースだった。冒頭で死体が発見された男である。読者は、チェイスを殺したのはカイアかテイトであろうと推察する。

チェイスとカイアは毎日のように会うようになり、カイアもチェイスを好きになるとともに、チェイスはカイアの体をもとめるようになった。カイアがテイトに失恋したかと思ったら、次の恋人が現れるというのは、読者にとっても嬉しい出来事であっただろう。

カイアがチェイスと付き合っていることを知ったテイトは、チェイスがろくでもない遊び人であることをカイアに忠告するけれども、カイアにしてみると自分を見捨てたテイトに、そんなことを言われる筋合いはない。カイアはテイトの忠告を受け入れなかったが、テイトが予想したように、カイアはチェイスに裏切られることになる。

その後のカイアには、二つの新たな展開が待っていた。一つは兄のジョディが戻ってきたことであり、ジョディによって、カイアの母が父に脅されて、カイアたちのもとに戻って来られなかったことを知る。しかし、カイアの父が母を脅して、湿地の家に戻らないようにするというのは理解しがたい行動である。カイアの父としては、自分はコストをかけずに、カイアの母がカイアやジョディの世話をし、その生存率を高めることは、自分の遺伝子を残すうえでは望ましいはずである。

もう一つの展開は、カイアが描いた生物の絵が評価され、出版されるようになったことである。この点については、研究者となって湿地に建てられた研究所に勤めるようになったテイトの口添えがあったのだろう。カイアの本は読者に好評で、よく売れたことになっている。

このあたりの展開は、生物についての出版物を出すことや、それが多くの読者を獲得することがいかにむずかしいか知っている私としては違和感がある。しかし、本書の作者自身がベストセラーを出していることを考慮すると、一般読者には、主人公のカイアの研究と努力が世間に広く認められたという点で、喜ばしく感動的なものかもしれない。

カイアの出版物は、カイアが住む湿地帯に生息する鳥や貝などを描き、その分類、生息環境、生態などについて解説したものである。この作業は、実はとてもむずかしい。すでに記載されている生物であれば、その生息地や生態を記載しても、新鮮味は乏しい。一方、新種を記載するためには、その分類群についての膨大な文献を読み、近縁種と比較検討することが欠かせない。湿地からほとんど出たことがなく、テイトに読み書きを教わっただけのカイアに、それができたとは思われない。

湿地の生物についての研究がこれまでほとんど行われていなかったのであれば、それは研究者に関心を持たれなかったからであり、それを公表したとしても注目を浴びることはないだろう。生態についていえば、なおさら研究のハードルは高い。どこに棲んでいる、何を食べているといった単純な生態を記述するだけでも、専門家としての教育を受ける必要がある。

この違和感は結末に向かってさらに大きくなっていく。チェイスが死んだ夜に、カイアらしき女性を見かけたという証言がえられたことから、カイアはチェイス殺しの容疑者として逮捕されてしまう。カイアにはチェイスを殺す動機があったけれども、チェイスが死亡したとき、カイアは出版社との打ち合わせのためによその町に出かけていた。

ここから、カイアの行動や裁判の進行についての記述が続いて、読者は多少うんざりとするかもしれない。このあたりの話は、日本では毎日のようにテレビドラマで流れている。結局、カイアは無罪となり、その後テイトと結婚して、湿地で生涯を終えるが、カイアの死後、テイトはカイアがチェイスを殺害したことを知る。

裁判でカイアが無罪になったことで読者は安堵し、さらにテイトと結ばれることによって、湿地の不幸な少女が社会的に成功し、幸せになったと思わせておいて、やはりカイアが自分を弄んだチェイスに復讐したことを知って、複雑な気持ちになる。カイアになりきった読者としては、チェイスは許せない存在であり、悪者である。悪者を成敗するのはベストセラーの常道である。

一方で、著作が人気を博し、作家として成功を収めつつあったカイアが、必ず成功するとは言えない殺人を犯さなければならないのだろうか、という疑問が重く心に留まってしまふ。カイアはよその町に出かけていたが、わずかな時間で湿地に戻りチェイスを殺害することは可能だった。そのためには限られたバスに乗る必要があり、また湿地で誰かに目撃される恐れもあった。目撃されれば、カイアの一生はだいなしである。

恋人と思っていた人間に裏切られるという話は、いつの時代にもどの町にも起こる話である。裏切られれば心は傷つくが、それで相手を殺そうとまで考える人間は少ないだろう。恋愛に夢中になっている恋人は、幸せな時間を共有するが、恋は実らないことが多い。どちらかがどちらかを好きでなくなった時に恋は終わるが、それはそれで仕方がない。遊び人のチェイスがカイアを騙したのが悪いと言う見方もできるが、テイトの助言もある中で、騙される方にも責任はある。日本のドラマでも、当人がドン底の生活に落ちたり、地位や収入を失うような脅迫に遭ったり、恋人や家族を殺されたりすることが殺人の動機となっている。過去の失恋で殺人まで犯すのは異常であり、殺さずに復讐する手段はいくらでもあるだろう。

私だったら、この小説の展開として、カイアの住む湿地帯が大規模な開発によって破壊され、カイアの家も土地も自然も失われるストーリーを考えるだろう。開発の責任者はチェイスである。愛する動物たちが死んでいく情景を前にして、カイアはチェイスを殺すことになる。これならば、読者はカイアの行動を受け入れることができる。

実際には、カイアが一人で生きてきた強い少女であり、自分を傷つけた人間を許せなかったのだと考えることはできるかもしれない。しかし、カイアがなぜ殺人まで犯したのかは、その心理描写が書かれていないので、ほんとうのところは不明だとしか言いようがない。

この殺人によって、湿地の哀れな少女というカイアのイメージは覆されてしまう。実際、カイアが他人のために尽くす行動は、本書では一切描かれていない。自分の成功のために、

できることは何でもするという、強いけれども利己的な少女。チェイスを殺すことによって、カイアはテイトもチェイスも自分のものとし、広大な土地と家も所有したうえに、自然のスペシャリストとしての社会的名声も手に入れた。

カイアに自己を同一視した読者は、日本の二時間ドラマでもありえない動機からチェイスを殺したカイアに戸惑いを感じるはずである。例えば、カイアが男でチェイスが女だとしたら、カイアの行動は激しく非難されるはずである。しかし、カイアが暴力的な父と、薄情な母から生まれたのであれば、カイアは多かれ少なかれ親の遺伝子の影響を受けているはずである。遺伝によって子の性質が決まる割合は人によって異なり、影響を受けないこともあるだろう。しかし、カイアが父から受け継いだ残虐的な個性をもっているとは思議ではない。

本書では生物の生態についての精密で美しい記述が際立っており、それを観察したカイアの生物観も興味深い。動物の間には食べたり食べられたりする関係があり、同じ種の個体間では生存競争があり、遺伝子を残すためにメスがオスを食べてしまうこともある。それでいて、生物の世界は乱れなく、美しく調和している。

しかし、生物の世界はそれだけで終わらない。1900年代の終わりごろから、生物が環境に適応していないことや、生物が必ずしも合理的な行動ばかりをするわけではなく、個性に応じて不合理な行動を見せることが注目を集めつつある。とくに人間では、過去の経験や目先の利益のために、最適ではない行動を示すことが、経済学などで明らかにされている。殺人やその他の不合理な犯罪は尽きることがない。本書の結末が、このような生物観によるものとしたら、出版にまで成功したカイアが理不尽な殺人を犯した理由として興味深い、おそらくちがうだろう。復讐は読者が興味をそそる出来事であり、それに焦点をあてることが本書の成功につながるであろうと著者が計算しただけであり、それはおそらく的をえていたと結論づけられる。

湿地で生きる貧しい少女が、親にも兄弟にも見捨てられながら逞しく生き抜き、やがて美しい女性になって男たちの注目を浴び、さらに自然についての知識と絵画の才能によって出版するという驚くべき成功に導かれ、最後には自分を裏切った男を殺したものの、無罪を勝ち取り、初恋の男性と結婚して幸せに生きる。チェイス殺しの謎をちりばめることによって、読者はこの小説を最後まで読み進めずにはいられない。

なぜ本書がベストセラーになったのかと言えば、いくつもの異なる世界での信じられないサクセス・ストーリーが詰め込まれているからである。最後の結末は、湿地の少女がただ偶然によって成り行きで成功したのではなく、カイアが強い意志によって自分の人生を開拓していたのだというメッセージなのかもしれない。

片野 修